



制作中の新作「混浴園」の前の会田さん

©KAZUKI

老害と言われてもいい。むしろ若者の邪魔をしないですから

大田区にアトリエを構える会田誠さん。絵画、写真、立体、パフォーマンス、インスタレーション、小説、漫画、都市計画など、その表現領域は多岐にわたり、デビュー以来、常に問題作を発表し続けています。日本はもちろん海外でも活躍する現代を代表する美術家です。

「学生時代はこっそり小説を書いて文学賞に応募して、一次通過はしたけど結局はそこまでとか、そんな風に時間とエネルギーを費やしていました。僕にとって美術家になるというのは喜びしい選択ではなかった。今も絵をずっと描いていて嫌だ。もう嫌だ」という気持ちになっ

てしまう。「絵具なんかもう触りたくない」と思っているに違いありません」と語る会田さん。「この年齢になって振り返ってみると、僕の作品のほとんどは、現代日本社会がテーマだと気づきました。『絶対日本社会をテーマにする。それ以外は絶対やらないぞ』なんて思っているわけではないですが、テーマが日本から完全に離れることはないですね」。

時代性についてもお聞きしました。「自分は90年代の作家だなと思っています。これ

だけは、やっておかねばいけない、世の中に見せておかねばいけないという使命感に駆られてつくった作品は、ほとんど90年代につくっています。売れているかいないかは時間のズレがあるとしても、人間30歳ぐらゐの時は表現者としてのピークであることが多いわけです」。

「バブルの余波もあって、90年代の終わりまではちょっと浮かっているような時代だった。21世紀は全世界的に困難な時代になってきた感じがしています。今は今の30歳ぐらゐの人が中心となって、時代を背負って格闘してつくるべきです。60歳の僕が参戦する必要も権利もない。「ノスタルジック」でいいと思っています。何だったら90年代は良かったなあ、活気があったなあ」みたいな。老害と言われてもいい。その方がむしろ若者の邪魔をしないですからね」。

会田 誠 Aida Makoto

1965年新潟県生まれ。東京藝術大学油画専攻卒業後、同大学院修了。代表作は「超空想空間(戦争時局RETURNING)」(1996)、「電信柱、カラス、その他」(2012)、「MONUMENT FOR NOTHING～赤い鳥籠」(2025)など。主な展覧は「天才とてごめんない」(高松市展 2012-13)、「GROUND NO PLAN」(横浜美術館 2018)、「愛国が止まらない」(ミヤマアートギャラリー 2021)など。

みつばち：本門寺の青空さん

いくつもの家から差し込む光が店内をやさしく包みこみコービーの香りとあふれてとても心地が良いです。壁に飾られた絵はどれも新しくもはがかり、地域の人がこの上質な空間と芸術に包まれたことになるのわがわが知っていました。

当てる方も増えている感じがします

「1度いらして、絵が気に入って入りたいとされる方もいらしてさそうです。常設だけではなく、作家の展覧会も行なっています。辻1年に1回程度の開催です。今後はもっと増やしていきたいと思います」。

第39回大田区在住作家美術展

10月27日(木)～11月5日(木)
●各10:00-18:00(観覧料は15:00まで)
●各10:00-18:00(観覧料は15:00まで)
●各10:00-18:00(観覧料は15:00まで)
同時開催：チャリティーオークション、色紙プレゼント、ギャラリートーク、講評コーナー



豊かな植栽と木のドアが印象



MONUMENT FOR NOTHING～赤い鳥籠 (2025)
撮影：藤原 誠 ©Aida Makoto. Courtesy of Mizuma Art Gallery

商店街 アート vol.26

大田区内の商店街にあるアートスポットやイベントを紹介します。



壁に飾られた絵画と窓から見える緑のコーポ

Gallery & Cafe「いちごの木」
● 大田区萩中3-12-16 Dream Ship 1F
● 京急京浜線「大鳥居駅」徒歩7分
● 11:00-17:00 ● 水・日曜・祝日

絵が目当ての方も増えている感じがします

Gallery & Cafe「いちごの木」(萩中)

環八通りから萩中公園へ向かう閑静な住宅街にあるのが2022年オープンしたGallery & Cafe「いちごの木」です。中庭にひととき大きな木がたっています。毎日のように赤い小さな実がなるので、いちごの木といえます。母がとても大事にしている可愛いので、お店の名前にしましたと語る店長の小方さん。明るい店内には素敵な絵画がいくつも飾られています。オーナーは、小方さんのお母さんである日本画家の辻智子さんです。「カフェでゆっくりするの好きなのですが、周りにそういうお店がなく、自分が行きたいカフェを作ろうと始めました。落ち着いたで私やほかの先生方の絵を観ながら、お茶を飲む空間にしました。絵の入れ替えは2か月に1回ほど、季節に合わせ展示しています。お客さんの反応を小方さんに伺うと、「絵がお目

恒子の登場が女性書家の活躍する機会を生んだ

大田区立熊谷恒子記念館

かな書の第一人者として活躍した熊谷恒子が生前に住んでいた自宅を改装し、1990年に開館したのが「大田区立熊谷恒子記念館」です。調査および改修工事のため2021年から休館していましたが、2024年に再開しました。担当の主任・飯島千尋さんと佐藤あずさんにお話を伺いました。

「かな書の専門の記念館は、全国的に見ても数少ない特別な存在です。恒子の作品170点ほどを所蔵し、代表作を展示している大変魅力のある記念館です。1階の奥の書斎が恒子自ら『遡清居』と名付けた仕事場です。書道具などが当時のまま残っています」と語る飯島さん。「実際に作家が暮らし制作していたお家で作品を観るのは、ギャラリーや通常の美術館では味わえない唯一無二の経験になると思います。作品も掛け軸であつたり額であつたり様々な種類があります。書美しさはもちろん、和歌の素晴らしい、表装の見事さなど、総合的に書文化を体験いただけます」と佐藤さん。

恒子が活動始めた頃、書の世界で「かな書」はどういう存在だったのでしょうか。飯島「幼少時から古典に親しんできた恒子は、中国から伝わった漢字にも関心を持ち、優美な書表現してきました。平安時代の古筆に沿った書き方、漢字から生まれた『仮名』の芯の通った表現が恒子のかな書です。繊細ですが、張りのある線が特徴で、そこが恒子のかな書の魅力であり、認められた点だと思います。昭和の時代は男性の書家が主力でしたので、女性の書家が活躍するには厳しい時代でした。熊谷恒子の登場が女性書家の活躍する機会を生んだと思います」。

近年は、パソコンやスマホが普及し、手書き文化が消えつつあると言われていて、飯島「学校教育や余暇において、書道を楽しむことは貴重な経験となります。大切な文化であるかな書を後世に継承していけたらと思っています。佐藤「ぜひ、多くの皆さんに、日本独自のかな書美しさに触れていただきたいです」。

大田区立熊谷恒子記念館

● 大田区南馬込4-5-15 ● 9:00-16:30(入館16:00まで)
JR「大森駅」から東武八王子線「荏原駅」入口「万福寺」下車
徒歩5分、都営地下鉄浅草線「南馬込駅」徒歩10分
● 開館(恒子の命日を除く)、年々(12/29-1/1)、展示替えの臨時休館
● 03-3773-0123 ● ota-bunka.or.jp/kumagai



恒子の書斎「遡清居」



昭和初期のモダン風が漂う応接室



主任の飯島さん(左)と佐藤さん(右)



筆を執る恒子が迎えた記念館の玄関

みつばち：西馬込ルウさん

字義書の方、お庭の植物の案内図をくださいました。きっと恒子さんは、四季折々に違った表情を見せるお庭を眺めながら、筆をとっていたのでしょう。そんな姿が思い浮かぶのも、お宅にお花がきれいに保存されているからです。

アートレガシー in おおた vol.25

大田区内にある文化財にスポットを当てて紹介します。



旧川端龍子邸主屋、中門前から玄関を見る

旧川端龍子邸と大田区立龍子記念館(国登録有形文化財)

旧川端龍子邸主屋および中門・仏間・待合室・書室、龍子記念館

川端龍子(1885-1966)は近代日本画の巨匠のひとりです。芸術は広く大衆と接するべきだという「会場芸術」の理念を掲げ、自宅に設けた天井まで4mに達する画室で力強い作品をいくつも生み出しました。また、自伝に「普通道楽」と記すように、自宅および記念館は自身で構想しています。石畳の形から照明器具に至るまで、龍子のこだわりが見えます。

龍子が馬込に移り住んだのは、1920年のことです。その時の自宅は空襲で大破するも、わずか2か月後には絵画「爆弾散草」(1945)へと昇華し、跡地を「爆弾散草の池」として造成しました。一方、1938年に建てた画室は奇跡的に戦禍を免れ、いま当時の姿を残しています。戦争を経て仏教への信仰を篤くした龍子は、再

建した自宅に仏間様を設けます。そこに併設した持仏堂に毎朝礼拝をするのが、晩年の龍子の日課でした。1963年、龍子は自身の書斎を記念して龍子記念館を開館しました。署名「〇」龍子にちなんだ形で、上から見るとまに龍子がうなっているような姿、龍子の理念を体現するような構造で、大型作品を鑑賞するのに十分なスペースと、展示空間の変化を見ることができま

す。営業日には、職員案内によって旧宅敷地(龍子公園)の見学が可能です。詳細は公式HP(ota-bunka.or.jp/ryushi)を確認の上、ぜひお越しください。※芸術家や作家が本名とは別に名乗るペンネームのこと。

文：稲葉実夢(大田区教育委員会 文化財担当)

● 大田区教育委員会 文化財担当 ● 03-3777-1281